

民俗博物館だより

Vol.37 No. 1

2011. 3. 1



源九郎稲荷神社の白狐渡御 (岸田正明氏撮影)

目 次

関西文化の日記念講演会要旨	
農具に見る古代の息吹	河野 通明 1
国際博物館の日・遠野物語100年記念講演会	
“大和し麗し”の民俗	岩井 宏實 4
民俗博物館展示実績一覧 (1974～2010年度) 7
みんなく春夏秋冬 ―平成22・23年度の活動他― 10

関西文化の日記念講演会

農具に見る古代の息吹

神奈川大学名誉教授
河野通明

はじめに

私はもともと文献史学の古代史専攻ですが、細かい事件史には興味がなく、社会構造を大きく捉えたかった。ところで前近代日本の基幹産業は稲作で、稲作の技術が進んで収穫が多くなると社会は豊かになり社会構造も変化する。農業技術が進歩すると農具の形が変わるはずですが、これまでの文献史料に頼った研究では古代でも「鍬」、近代でも「鍬」で形の変化は見えてきません。

形の見える資料には絵画資料と考古資料がありますが、絵は写真ではないので適当なごまかしもありますし、考古遺物は壊れて出土するので用途の分からないものが多い。この絵画資料のウソ・ホントの見分けや壊れた出土品の復原にも、まずは伝統的な農具の形を知っておく必要がある。そこで「農家の納屋からアジアが見える」と名刺に刷り込んで大阪から日帰り圏の博物館・資料館の農具の比較調査を始めたのが約30年前で、その頃から奈良県立民俗博物館にはお世話になっています。

歴史の都の民俗博物館

奈良県立民俗博物館のすごいところは3つあります。第1は、奈良県は飛鳥・平城京・大仏・正倉院といった古代史の中心都市にもかかわらず、そこに県立の歴史博物館ではなく民俗博物館を置いた。この見識がすごい。第2は県内を網羅した資料は4万2千点、ダブりを恐れず壊れた部品も収集、この結果、収蔵庫に入ると県下の全域が眺望できます。第3は博物館資料は整理して公開するのが当然ながら忙しくてなかなか出来ないのが現状。しかしこの博物館では館蔵資料をテーマごとにグループ化して、県指定・国指定を目標に整理を進めて成果をあげており、「奈良県の牛耕用具」も県指定文化財になりました。

民具には遺伝子がある

これまで農具の形が地域によって違うのはよく知ら

れていて、それは代々のお百姓さんたちが土地の地形や土質にあわせて改良を重ねた結果と説明してきました。つまり農具はその土地にフィットした合理的な形になっているというわけです。ところが実際に各地の博物館・資料館を回ってみると、地形や土質に合っていないものが沢山見つかります。改良の余地のある農具が多々あるのです。

伝統的な農村で農具が壊れたなら、同じ形で更新しますね。犁の耐用年数が仮に20年だとしますと100年で5回更新されますが、形は変わらない。そうだとすると1000年で50回更新、それでも形は変わらず、個体は入れ替わっても形態は継承されることになる。これは象の子は象、パンダの子はパンダと遺伝子で形質が継承されるのと同じで、民具にも遺伝子があったこととなります。

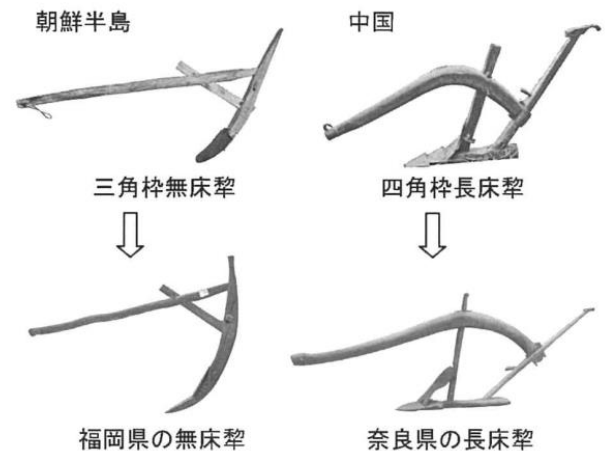


図1 福岡県と奈良県の在来犁
「民具からの歴史学」

いま牛に引かせて田畑を耕す犁について図1で見えていきますと、福岡県北部では三角枠で犁床のない無床犁が使われてきましたが、奈良県では四角枠で犁床の長い長床犁が使われてきました。ところでご存じのように日本列島は山がちで、山に降った雨は川となってそれぞれの地域で海に出ます。したがってどの県でも山には棚田があり平野にも田が広がり、砂地もあれば粘土質土壌もある。福岡県では山田でも平野の田でも砂地でも粘土質土壌でも無床犁が使われ、奈良県では山田でも平野の田でも砂地でも粘土質土壌でも長床犁を使ってきました。つまり犁の形態は地形や土質にあわせて改良されていたわけではなかったのです。では

違いの原因は何か。

犁はカラスキという呼び名のように日本人の発明ではなく朝鮮半島や中国から伝わってきたものです。ところが犁の形は朝鮮半島では三角杵無床犁、中国では四角杵長床犁と違っていています。つまり福岡県の無床犁は朝鮮系、奈良県の長床犁は中国系だったのです。これはその地に朝鮮系渡来人が来たか来なかったかといった歴史的事情によって決まっていたこととなります。それなら各地の民具の形の違いから地域ごとの古代史を復原できることになり、これを「民具からの歴史学」と名づけていま研究を進めています。

大化改新政府の長床犁普及政策

福岡県の朝鮮系犁は渡来人の持ち込みで説明できますが、九州から関東まで分布する中国系犁については、中国から渡来人が大挙してやってきた歴史はありません。中国系長床犁は奈良時代の古辞書に犁床の記載があることから8世紀初頭の奈良ではかなり普及していたと考えられ、伝来は7世紀となります。7世紀なら日中の民間交流はまだないので政府の外交ルートによる導入と普及政策があったこととなります。

7世紀にはほぼ四半期ごとに①聖徳太子・馬子政権、②蘇我蝦夷・入鹿が牛耳った政権、③中大兄=天智政権、④天武・持続政権の4つの政権が交替しました。長床犁を導入したのはどの政権か。

長床犁を各地に普及させるには政策を受け止める国・郡・里の地方組織が不可欠ですが、これは大化改新に始まるので①②は失格、また長床犁の導入には遣唐使の派遣が条件ですが、④の天武・持続政権は遣唐使を派遣していないので失格、その結果、③の中大兄=天智政権つまり大化改新政府が中国系長床犁を導入して全国に普及させたこととなります。

これは明治政府の殖産興業政策にあたるもので、『日本書紀』に記録されなかった重要な政策が犁の遺伝子として農家の納屋で保存されてきたのです。

奈良県は全県が政府モデル犁

現代では精密な設計図で技術を伝えますが、古代では実物模型を使いました。大化改新政府は中国系長床犁を日本向けにアレンジした政府モデル犁を大量に作

って各地の評督こりのかみ（のちの郡司）に送りつけ、コピーさせて普及を図りました。それまで朝鮮系犁を使っていた地域では政府モデル犁との混血型が生まれますが、政策後に渡来した百濟・高句麗難民たちは政府モデル犁の影響を受けないので朝鮮系三角杵犁がそのまま使われることとなります。福岡県の無床犁は百濟難民が持ち込んだものと考えられます。

図2は奈良県立民俗博物館の60台の犁の分布を地図に表したのですが、全県一区ですべて政府モデル犁です。他県では政府モデル犁の他にさまざまな形の混血型が混じるのですが、県内すべて政府モデル犁とは奈良県だけに見られる特異な現象です。

奈良県高市郡いまきのこおりは今来郡とも呼ばれて朝鮮系渡来人の民族自治区でした。分布図の27、28がその犁ですが、朝鮮系三角杵犁ではなく政府モデルの中国系長床犁です。これはなぜか。いまきのてひと今来才伎と呼ばれた彼らは技術官僚として政府に勤めており政府モデル犁の作成にも関わったと考えられます。彼らにとっては長床犁普及政策は自分たちの政策だったので使いなれた朝鮮系犁を捨てて率先して政府モデル犁を使ったと考えられます。

また奈良県各地の豪族たちは閥僚クラスから下級役人まで、多くの人材を政権に送り込んでいたので、彼らにとっても大化改新政府はわが政府、長床犁普及政策はわが政策だったと考えられ、奈良県が大化改新政府のお膝元だったことが、全県一区で政府モデル犁となった原因と考えられます。

1350年前の大化改新政府の長床犁普及政策の痕跡が奈良県の農家に残っていたのであり、奈良県が県立の民俗博物館を持っていたことの見識の高さが、遷都1300年を迎えて、改めて証明されたこととなります。

民具は「有形歴史文化財」

これまで民具は「有形民俗文化財」とされてきましたが、これまで見てきたように、民具は『古事記』や『日本書紀』が記録してこなかった各地の庶民の歴史を遺伝子として記録保存していることが分かってきました。これからは民具は「有形歴史文化財」として、住民ぐるみで守っていく必要があるのではないのでしょうか。

(2009年11月23日当館講演)

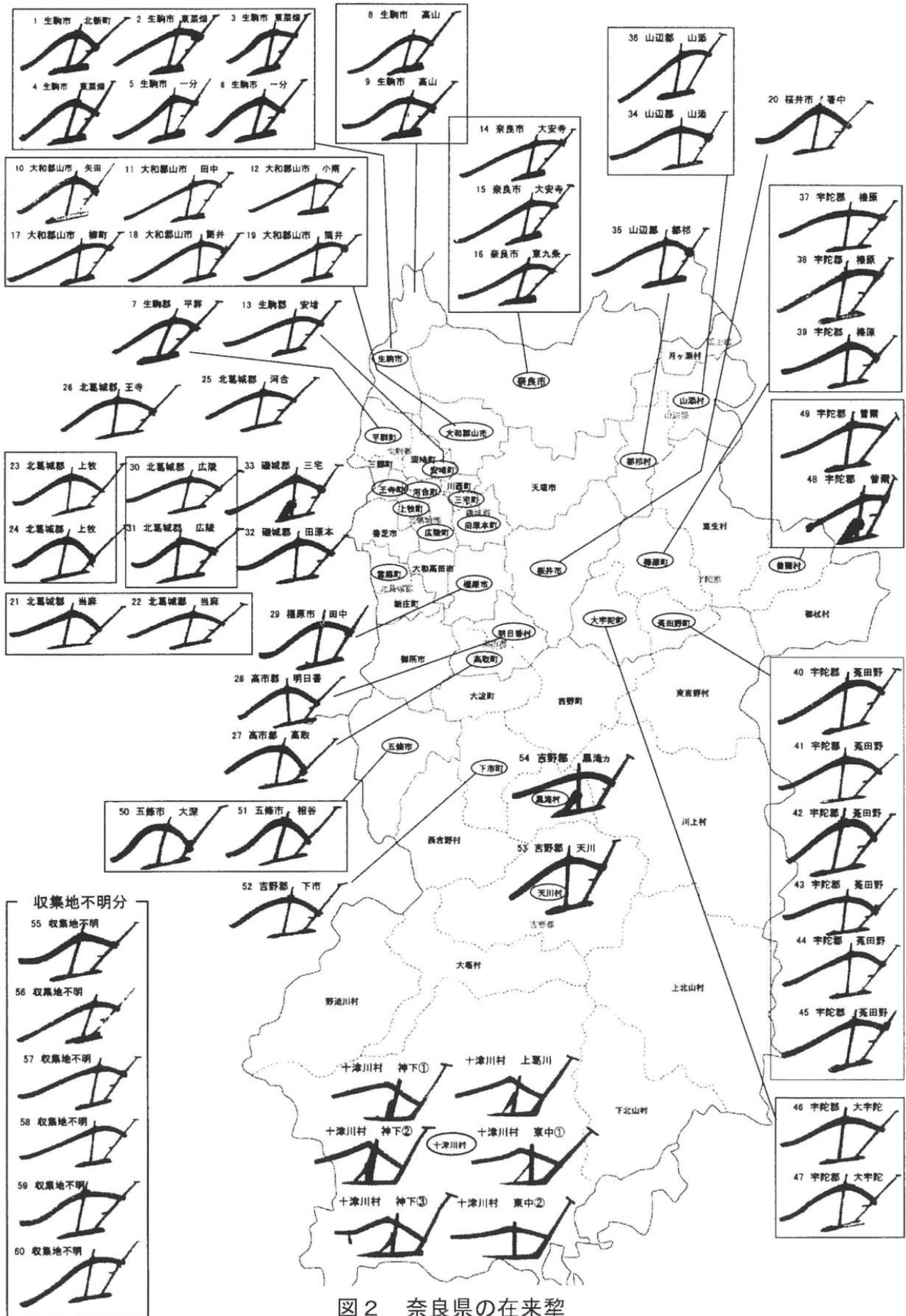


図2 奈良県の在来犁

(市町村区画は平成16~18年の合併以前とした。)

国際博物館の日・遠野物語100年記念講演会

“大和し麗し”の民俗

岩井宏實

長年民俗学を勉強していますが、奈良で生まれて奈良で住まいをするという大変奈良に愛着を抱いています。今回なぜ“大和し麗し”の民俗と題したかという、これは大変大きな問題で、今年は平城遷都1300年で沸いていますが、その前に先ず葛城の王朝と磯城・磐余と飛鳥・藤原の都がないと、平城京が成り立ち得ないのです。その点を我々は忘れてしますので、もう一度ここで検証したいのです。我々が今伝承しております日常の民俗こそが実はこの時期に成立しているわけです。その文化を庶民が日常生活の中で綿々と伝えているということを見逃しているわけです。それを今日はお話を申し上げたいと思います。“大和し麗し”と付けたのは平城京が成立するためには、前史があるわけで「大和は国のまほろば たたなづく青垣 山ごもれる大和し麗し」という言葉が、実は大和を最もよく表現している言葉で、景行天皇の皇子の日本武尊が大和から伊勢に赴く時の歌です。『古事記』・『日本書紀』に出てくる話は実は紀元3世紀頃の話が時代を追って延ばしているのです、実際はおそらく3世紀頃の話と考えられます。ということこれは磯城・磐余の時代の話です。この時期が今話題となっている邪馬台国の卑弥呼の時代になるわけです。この時代の信仰を最もよく伝承しておりますのがダケとモリの信仰と野神・八王子という我々の身近に伝承されている信仰なのです。「大和し麗し」という言葉が後々までも人口に膾炙されたわけで、「あおによし」よりもむしろこの言葉こそが我々大和人にとっては一番重要な歌です。この時代の麗し大和の国はどのような状況であったかということ、我が国最初の王朝が開かれたのは葛城です。実はここには一言主の神が祭られております。これは一言で諸々を解決してくれる神である。この葛城の時代は『古事記』でいいますと、仮に神武天皇を初代としますと2代と5代6代天皇がここで都を作られたとされているわけで、都としては非常に古い時代になります。古事記で言うと紀元前の話になるわけです。古事記は時代をのばしておりますのでおそらく時代的には2、

3世紀ということになります。その次の時代に、役行者がそこから吉野へ行くわけです。後に行基もそこで修行をします。葛城は大和にとって重要な位置を占めていました。次の磯城・磐余の時代と言いますのは神武天皇即位記に磯城の村というのが出てきております。桜井・橿原のあたりが磯城・磐余の里です。今も橿原市には磐余神社が祭られていますが、この辺りが磯城・磐余で、磐余の時代は崇神天皇・欽明天皇の時代と言われております。この「大和し麗し」の歌は磯城の時代の歌です。当時、大和という言葉は奈良県一円を指していないわけです。磯城のあたりが大和です。この時期に三輪山をご神体としてお祀りするという三輪山の信仰が出てきます。これは山の信仰です。祭祀の遺跡として神奈備、磐座、神籬があり、歴史の上で明確になってくるのはこの時代です。このことが歴史の上で語られずに現在の我々の民俗の中に綿綿と継承されているということで、私が“大和し麗し”と名付けた理由があるわけです。磯城・磐余の文化を生活の中で継承しているんだということです。

そこで三輪山の問題ですが、これは大和国の一宮になるのにはやはりそこに意味があるわけです。磐余は履中、清寧、継体天皇が都を営まれた時代で大和王権の中心で、葛城は大和王権を作り上げる前史の時代でありました。これがあるからこそ次ぎに飛鳥・藤原、平城があるのです。平城遷都1300年をいうのであれば、このあたりからもう一度考えなければならないと思います。磯城・磐余の時代から神奈備の思想はあるわけで神奈備は三輪の神奈備、葛城の神奈備、布留の神奈備、飛鳥の神奈備があり、布留の神奈備は石上神宮を考えればよいし、飛鳥の時代になって大和三山が出てきます。大和三山も一つの神奈備です。日本の祭りというのは、いつもそこに神様がいるのではないのです。我々のいま住む世界を現世、別の世界を他界といい、他界には天空他界と山中他界と海上他界と日本人は三つの他界を考えたわけです。それは神々が住む場所で人が亡くなると神になるわけです。だから人が死ぬと他界されましたという。聖なる世界へ赴むかれたということです。三輪山にしても神がお降りになる山、神奈備と考えました。ところがそこに重疊ちようじょうとした岩石を見つけたのでいつでも神がおいでになると意識しそこ

に登ってはいけなとしました。だから三輪山は禁足地になったのです。我々は神社があつて森があると誤解しているが、鎮守の森があつて神社があるわけです。祈願者の意に応じて神様がお降りになるには依代よりしろが必要になる。何か祈りたい時に神に降臨してもらうのに依代が必要になる。絶えず緑をたたえている木が必要になる。そこへお降りになり、終わるとお帰りになる。次にお降りいただくときは別の木にお降り頂く。だから沢山の木が必要になるのです。季節を現すものとして季節の草花におりていただきます。2月だと桜の花、3月でしたら桃の花、5月だったらツツジの花、9月だと菊の花となる。沢山の木が必要になるから森になる。杜というのは木偏に土と書きます、神社の社はそこから来るんです。木偏が示偏になります。森があつてそこにたえず神がおられると意識して祠を作り上げると神社ができるのです。今でも諏訪でも出雲大社でも社殿の中心は木すなわち柱です。その点を十分に考えなければなりません。

最初の条坊制が藤原から奈良です。奈良に移って「あおによし ならのみやこはさくはなの」という言葉が出てくるわけです。このあたりまでに日本人の心というものが形成されるわけでその心が現在の私たちに伝わっているのです。したがって我々は日本歴史の担い手であると考えることが出来るのです。三輪山は磐座を発見してからああいう形になりました。そうした例は各地にあります。磯城の東へ行きますと東山中の都祁では山があつてダケと呼んでいますが、磐座を見たがために、山に登らないで下に拝殿を造って山口神社を造りました。これはやはり神奈備から磐座へという変化です。これが我々の日常生活の中ではダケとモリです。我々がダケといっているのは神奈備の思想を継承して、ダケで代表的なのは水分みくまり神社です。大和には葛城の水分神社、吉野の水分神社、宇陀の水分神社、都祁の水分神社があります。クマリというのは配るという意味です。この四社が大和に存在するということはダケ、神奈備の信仰と同じです。神がおいでになって神意をあまねく里人に配る。生活の中で大事なのは農耕社会にはいると水です。だから水を配る神様がそこにおいでになる。これも神奈備と考えてよいのです。水を配るというだけでなく水分はそういう

深い意味を持っています。ところで、ダケにミニダケがあります。これが塚です。小さいモリも同じ意味です。そこで野神というのもそうした小さいモリであり塚なんです。モリであるが、さらに神様の降臨のために依代の常緑の木を設けたのです。野神の多くは榎の木です。ハヌキの木がある。これが重要で大和人は「シミツタレのハンの木」という諺があります。ケチなことをシミツタレといい、ケチな人のことをハンの木という。どういうことかというハンの木は榎科の木です。ハンの木、同科の榎の木のあるところは、水田稲作ができるのです。東の山麓でも、ハンの木があつたんです。それが水田稲作の目安になつたんです。

大和ではレンドという春の行事があります。これが大和では重要なことで、東日本と西日本では少し季節がずれますが、農耕の手順もずれるんですが、西日本では「春ゴト」という言葉があります。これはいよいよ農耕の実際にかかるという前に一日神様を迎えてお祭りをするという行事があり、その一つに大和ではレンドがあります。これは地域によって、3月18日の観音さんレンド、法隆寺レンド、文殊さんレンド、節供レンド、大和レンド、薬師さんレンド、4月3日の神武さんレンド、大神神社の三輪レンド、虚空蔵レンド、お大師さんレンド、矢田レンド、奈良県の春ゴトとして重要な行事です。當麻レンドははるか二上山をダケとして仰いで練り供養が行われる。當麻寺は二上山の信仰を基本にしている。自分達の一番馴染みのある日を春ゴトの日を置き、これが連綿と伝わっているのです。

ところで、今年は柳田國男の『遠野物語』刊行100年にあたりますので、柳田國男の民俗学の形成過程について、若干申し添えます。

柳田國男は、明治8年(1875)7月31日、兵庫県神東郡田原村辻川(現神崎郡福崎町辻川)に、松岡操とたけの6男として生まれました。松岡家は代々医者でした。13才のとき、茨城県の布川に出て医者を開業した長兄鼎のもとに預けられました。その布川徳満寺の地蔵堂にかけてあつた一枚の絵馬のことは晩年まで忘れられなかったといひます。それは産褥さんじょくの女が鉢巻を締めて、生まれたばかりの嬰兒を押さえつけている悲惨な図柄で、障子にうつった女の影には角が生えてい

て、その傍に地藏様が立って泣いているという、いわゆる間引きを戒める絵馬でした。この絵馬を見た感懐と、明治18年(1885)の大飢饉による惨事の体験が、柳田國男をして「私を民俗学の研究に導いた一つの動機ともいえるものであって、饑饉を絶滅しなければならぬといふ気持ちが、私をこの学問にかり立て、かつ農商務省に入る動機にもなった」というように、農政学・民俗学に向わしめたのでした。

明治23年(1890)の夏、國男は愛知県の伊良湖岬に一ヶ月ほど滞在した。そのとき、波打ちぎわに椰子の実の漂うのを三度見た。東京へ帰って國男がこの話を友人の島崎藤村にしたことから、藤村の「椰子の実」のすばらしい詩が生まれたのでした。國男自身も「伊勢の海」と題する一文を草し、それはのちに「遊海島記」と改題して雑誌『太陽』に発表しました。「嵐の次の日に行きしに、椰子の実一つ漂い寄りたり、打ち破りて見れば梢を離れて久しからざるにや、白く生々としたるに、坐に南の島恋しくなりぬ」という実に美しい詩情豊かな紀行文で、國男にとっても紀行文学の先駆でありました。

しかし、それはたんなる紀行文ではなく、実に雄大なロマンに満ちた構想が芽生えていたのでした。それはまた國男の学問の方向をきめるものでした。遠い南の島に産する椰子の実が、日本列島に流れつくのは、黒潮に乗ってであろう。ならば人も黒潮の流れに沿って、しだいに島々をたどりながら、南から北へと移り住むこともあったであろうというものです。いわゆる民俗と文化の道“海上の道”を求めようとしたのでした。

明治33年(1900)東京帝国大学法科大学政治科を卒業した國男は農商務省の役人となった。翌年柳田家に養嗣子として迎えられるが、そのころ、早稲田大学や専修大学で農政学の講義をした。早稲田の聴講生のなかに永井柳太郎や大山郁夫などもいたのであった。2年のち農商務省から法制局参事官になるが、この時代の柳田は、社会科学として、経済論として農政学をみた数少ない明治農政学者の一人であり、その業績はのちの『時代と農政』『日本農民史』『都市と農村』などの著述にみることができます。

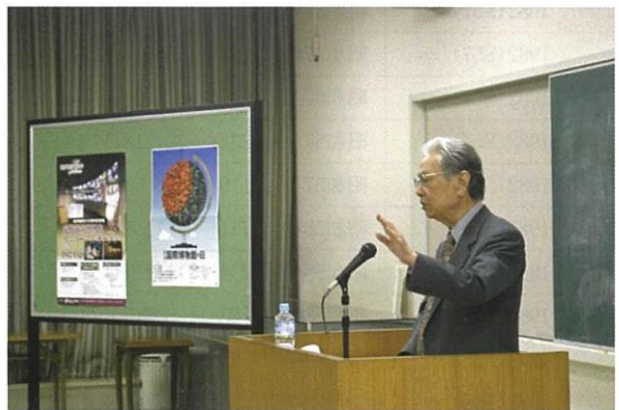
明治41年(1908)には、九州での講演旅行の道をまげ

て宮崎県の椎葉村に入り、そこで猪狩りについての話を聞き、その見聞をまとめ狩猟の伝書を添えて、翌年『後狩詞記』を公にしました。わが国における民俗学の最初の書物であり、採集記録を主体とし、のちに民俗学の特色となる、民俗事象を民俗語彙を索引としてひき出すという方法の端緒をなすものでありました。

翌年には『石神問答』『遠野物語』を相ついで出版しますが、ことに『遠野物語』は、遠野の人佐々木喜善の語る民間伝承のさまざまを克明に記したもので、『後狩詞記』よりもなを完全な採集記録でした。しかもそれはたんなる採集報告ではなく、抒情と哀傷のにじむ優れた文学として評価されるものでもありました。また、この書は日本のインテリがあまりにも西洋的思考に馴れすぎていることにたいして、強い反省を求めたものでもありました。

この『後狩詞記』と『遠野物語』は、まさに日本民俗学の記念塔ともいべき名著であります。

昭和50年に柳田國男生誕百年記念の特別展を大阪市立博物館が担当して、東京三越と大阪市立博物館と熊本鶴屋で行いましたが、そのさい遠野のオシラさまを出品していただくのに、A家では老婆が拜んで神意をうかがい、「うちのオシラさまは遠い所までは行きたくないで大阪までは行く」とお告げがあり、B家のオシラさまは「せっかくの機会だから熊本まで行く」とお告げがあり、3会場に出向されました。昭和50年にそういう世界があり今もその風は生きています。『遠野物語』はまさに日本人の精神生活を如実に現しています。こうした文化を顕彰するのも民俗学の一つの使命であります。



(2010年5月23日当館講演)

奈良県立民俗博物館 展示実績一覧

年度	期間	種類	展示名称
1974 (S49)	昭和49年11月10日開館	常設展	大和の暮らし 稲作・大和の茶・山の仕事・生業を支えた職人展(各コーナー)
1975 (S50)	昭和50年10月10日～11月24日	特別テーマ展	大和の薬と行商
1975 (S50)	昭和50年11月27日～51年3月28日	常設展	しごと・きもの・たべもの
1976 (S51)	昭和51年3月30日～10月7日	テーマ展・常設展	くらしの中の火
1976 (S51)	昭和51年5月5日～10月31日	コーナー展	竹の利用(I) 藁の利用(II)
1976 (S51)	昭和51年10月10日～11月24日	特別テーマ展	灌漑と雨乞
1976 (S51)	昭和51年11月27日～52年3月27日	テーマ展	調度 ～むかしのインテリア～
1976～1977 (S51～52)	昭和51年11月2日～52年5月3日	コーナー展	竹の利用(II)
1977 (S52)	昭和52年3月31日～9月27日	テーマ展	運搬 ～物と人の移動～
1977 (S52)	昭和52年5月31日～10月30日	コーナー展	藁の利用(III)
1977 (S52)	昭和52年10月1日～11月30日	特別テーマ展	念仏信仰 ～供養と祈願～
1977 (S52)	昭和52年12月4日～53年3月28日	テーマ展	食器具 ～儀礼とうつつ～
1977～1978 (S52～53)	昭和52年12月4日～53年5月31日	コーナー展	脱穀 ～センバコキ～
1978 (S53)	昭和53年4月2日～9月24日	テーマ展	農具 ～脱穀と調整～
1978 (S53)	昭和53年10月1日～11月26日	特別展	織物とその技術
1978 (S53)	昭和53年12月2日～54年3月27日	テーマ展	木と民俗 ～樹・その利用と信仰～
1979 (S54)	昭和54年4月3日～6月3日	テーマ展	竹・伝承技術と振興
1979 (S54)	昭和54年6月9日～9月24日	テーマ展	日々の暮らし ～くらしと用具～
1979 (S54)	昭和54年9月30日～11月25日	特別テーマ展	寺院と年中行事
1979 (S54)	昭和54年12月23日～	常設展(新企画コーナー)	生業を支えた職人
1980 (S55)	昭和55年4月1日～6月1日	テーマ展	諸職一村の職人・町の職人
1980 (S55)	昭和55年6月7日～9月28日	テーマ展	日々の暮らし ～住いと食～
1980 (S55)	昭和55年10月5日～11月24日	テーマ展	農耕儀礼 ～御田まつりと野神まつり～
1980 (S55)	昭和55年12月2日～3月29日	テーマ展	日々の暮らし ～住いと衣の用具～
1981 (S56)	昭和56年4月8日～9月27日	テーマ展	日々の暮らし ～台所の民俗展～
1981 (S56)	昭和56年10月8日～11月29日	特別テーマ展	日本人の祈り ～小絵馬～
1981 (S56)	昭和56年12月8日～57年2月20日	速報展	民俗文化財速報展・藤箕と板箕
1981 (S56)	昭和56年12月8日～57年3月28日	テーマ展	大和に眠る民俗文化財 ～木と民俗～
1981～1982 (S56～57)	昭和57年2月21日～6月19日	速報展	民俗文化財速報展・庚申講と六斎念仏講
1982 (S57)	昭和57年4月8日～9月12日	テーマ展	日々の暮らしシリーズ藁と生活
1982 (S57)	昭和57年9月23日～11月11日	特別テーマ展	奉懸絵馬と村の暮らし
1982 (S57)	昭和57年11月21日～58年3月27日	テーマ展	農具 ～農具にみる先人の知恵～
1982 (S57)	昭和57年6月20日～9月22日	速報展	民俗文化財速報展・町家の民具
1982 (S57)	昭和57年9月23日～12月18日	速報展	民俗文化財速報展・祈願・授与小絵馬
1982 (S57)	昭和57年12月19日～58年3月27日	速報展	民俗文化財速報展・膳と重箱
1983 (S58)	昭和58年4月7日～9月11日	テーマ展	県指定有形民俗文化財吉野の山村生産用具
1983 (S58)	昭和58年9月23日～11月11日	特別テーマ展	山の信仰と吉野修験
1983 (S58)	昭和58年11月23日～59年3月28日	テーマ展	暦と時
1983 (S58)	昭和58年4月7日～7月10日	速報展	民俗文化財速報展・大絵馬
1983 (S58)	昭和58年7月12日～11月22日	速報展	民俗文化財速報展・はたおりの準備
1983 (S58)	昭和58年11月23日～59年4月7日	速報展	民俗文化財速報展・桶とその制作用具

年度	期間	種類	展示名称
1984 (S59)	昭和59年4月8日～8月25日	テーマ展	大和のはたおり
1984 (S59)	昭和59年9月7日～10月13日	特別テーマ展	大和の年中行事
1984 (S59)	昭和59年10月24日～60年3月24日	常設テーマ展	日々の暮らし
1984 (S59)	昭和59年4月8日～9月6日	速報展	民俗文化財速報展・仕事着
1984 (S59)	昭和59年9月7日～12月19日	速報展	民俗文化財速報展・娯楽
1984 (S59)	昭和59年12月20日～60年3月24日	速報展	民俗文化財速報展・人形
1985 (S60)	昭和60年4月10日～9月16日	テーマ展	女性と暮らし
1985 (S60)	昭和60年10月3日～11月24日	特別テーマ展	水と生活 ～大和の水の歴史～
1985 (S60)	昭和60年12月10日～61年3月21日	テーマ展	家具・調度と生活
1985 (S60)	昭和60年4月10日～9月16日	速報展	民俗文化財速報展・仕事着
1985 (S60)	昭和60年10月3日～11月24日	速報展	民俗文化財速報展・火事装束
1985 (S60)	昭和60年12月10日～61年3月21日	速報展	民俗文化財速報展・下駄と下駄職人
1986 (S61)	昭和61年4月9日～62年2月28日	テーマ展	大和の暮らし ～衣食住の用具～
1986 (S61)	昭和61年4月9日～9月28日	速報展	民俗文化財速報展・現代の小絵馬
1986 (S61)	昭和61年9月30日～昭和62年2月28日	速報展	民俗文化財速報展・むかしの教科書
1987 (S62)	昭和62年5月21日～63年6月30日	特別展	奈良県100年記念展 明治・大正・昭和和生活資料展 ～ムラとイエの暮らし～
1988～1989 (S63～H元)	昭和63年7月15日～平成元年6月30日	テーマ展	むら・いえの暮らし展
1989～1990 (H元～2)	平成元年7月22日～2年8月31日	特別テーマ展	大和のはたおり用具
1990 (H2)	平成2年9月15日～3年1月17日	特別テーマ展	まつりといのり
1990～1991 (H2～3)	平成3年2月11日～9月1日	収蔵品展	村と家の祭りごと
1991 (H3)	平成3年9月15日～12月15日	特別テーマ展	吉野の山村と伝承文化
1991～1992 (H3～4)	平成4年1月15日～8月30日	収蔵品展	吉野の暮らし
1992 (H4)	平成4年9月15日～12月6日	特別テーマ展	龍蛇のまつり・伝説
1992～1993 (H4～5)	平成5年1月5日～8月29日	収蔵品展	まつるこころとかたち ～祈願・鎮魂・報賽～
1993 (H5)	平成5年9月19日～11月28日	特別テーマ展	旅 巡礼と参詣
1993～1994 (H5～6)	平成6年1月5日～8月28日	収蔵品展	暮らし絵と描かれた用具
1994 (H6)	平成6年9月15日～11月20日	特別テーマ展	葛城山麓の道と信仰 ～修験・念仏～
1994～1995 (H6～7)	平成7年1月5日～8月31日	収蔵品展	葛城山麓の民具
1995～1996 (H7～8)	平成8年1月14日～8月31日	収蔵品展	衣生活をめぐる民具
1996 (H8)	平成8年9月21日～11月17日	特別テーマ展	鬼の世界 ～信仰・行事習俗に現れる鬼の諸相～
1996～1997 (H8～9)	平成9年2月1日～8月31日	収蔵品展	暮らし絵に描かれた生活用具 ～運ぶ・食べる・住む～
1997 (H9)	平成9年9月21日～11月9日	特別テーマ展	大和川水辺の民俗 ～川・船・暮らし～
1997～1998 (H9～10)	平成10年1月6日～8月30日	収蔵品展	日々の暮らし ～水をめぐって～
1998 (H10)	平成10年9月19日～11月15日	特別展	初瀬・多武峯山麓の民俗 ～祭礼と宮座～
1998～1999 (H10～11)	平成11年1月5日～8月29日	収蔵品展	磯城郡の民具 ～はかる・たがやす・まつる用具～
1999 (H11)	平成11年9月18日～11月14日	特別展	鬼・まじないの世界 ～鬼が鬼を制する諸相～
1999～2000 (H11～12)	平成11年12月5日～12年7月9日	収蔵品展	暮らし絵と昔の用具 ～遊ぶ・楽しむ・学ぶ～
2000 (H12)	平成12年7月29日～9月24日	特別展	奈良晒 ～近世南都を支えた布～
2000～2001 (H12)	平成12年10月7日～13年3月4日	開館25周年展	開館25周年展 暮らしの風景 ～郷土の民俗25年～
2000～2001 (H12～13)	平成13年3月24日～13年9月2日	収蔵品展	暮らしの中の織維工芸
2001 (H13)	平成13年9月22日～11月25日	特別展	奈良墨筆の伝承文化
2001～2002 (H13～14)	平成13年12月8日～14年9月1日	収蔵品展	奈良県古農具・唐箕 ～大和の農村と農業技術史～

年 度	期 間	種 類	展 示 名 称
2002 (H14)	平成14年9月21日～11月24日	特別展	お金 近代のお金と暮らし ～商う・祈る・貯める～
2002～2003 (H14～15)	平成14年12月14日～15年8月31日	収蔵品展	祭りと供え物 ～祭礼行事の祭具神仏への供え物の諸相～
2003 (H15)	平成15年9月.20日～11月24日	特別展	大和もめん
2003 (H15)	平成15年12月13日～16年2月22日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅰ 絵馬と縁起物
2003 (H15)	平成16年3月2日～4月4日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅱ 三月節供 ～雛祭り～
2004 (H16)	平成16年4月17日～6月27日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅲ 五月節供と子供のまつり
2004 (H16)	平成16年7月17日～8月29日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅳ 夏の民具
2004 (H16)	平成16年9月18日～11月23日	特別展	民具が語る暮らしの変遷 ～資料収集30年の軌跡～
2004 (H16)	平成16年12月11日～17年2月13日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅴ 春を待つ間に～昔の冬の暮らし～
2004 (H16)	平成17年2月26日～4月3日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅵ 三月節供 ～雛まつり～
2005 (H17)	平成17年4月16日～6月5日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅶ 五月節供 ～民俗資料から見る「子は宝」～
2005 (H17)	平成17年6月25日～8月28日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅷ 忘れえぬ夏 ～ちょっと昔・昭和の生活資料～
2005 (H17)	平成17年9月17日～11月27日	特別展	食をめぐる民俗 ～アイとトッキョリ～
2005 (H17)	平成17年12月17日～18年2月12日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅸ 農村明治から大正・昭和の冬 ～春迎えの民俗～
2005 (H17)	平成18年2月25日～4月2日	シリーズ展	四季おりおりの民具Ⅹ ひな祭り ～雛人形にみる祓え～
2006 (H18)	平成18年4月29日～8月27日	シリーズ展	民具は語るⅠ 水の民俗 ～生命と社会を支えるシステム～
2006 (H18)	平成18年9月23日～11月26日	特別展	暮らしを支えた手わざ ～鍛冶屋・檜木屋～
2006 (H18)	平成18年12月16日～19年2月12日	シリーズ展	民具は語るⅡ たがやす
2006 (H18)	平成19年2月24日～4月8日	季節展	ひなまつり ～人形たちの宴～
2007 (H19)	平成19年4月28日～8月26日	シリーズ展	民具は語るⅢ 人が動くモノが動く ～交通・運輸・通信の用具～
2007 (H19)	平成19年9月22日～11月25日	特別展	重要有形民俗文化財指定記念 木を育て、山に生 きる ～吉野・山林利用の民俗誌～
2007 (H19)	平成19年12月8日～20年2月11日	シリーズ展	民具は語るⅣ あかりの用具と暖房具
2007 (H19)	平成20年3月1日～4月6日	季節展	ひなまつり ～人形たちの宴～
2008 (H20)	平成20年4月26日～8月24日	シリーズ展	民具は語るⅤ 台所の民具
2008 (H20)	平成20年7月26日～9月28日	特別陳列	奈良茶碗コレクション
2008 (H20)	平成20年9月20日～11月24日	特別展	衣の昔 ～おばあちゃんが子どもだったころ～
2008 (H20)	平成20年12月13日～21年2月1日	シリーズ展	民具は語るⅥ 家具・調度 ～住いの民具～
2008 (H20)	平成21年2月28日～4月5日	季節展	ひなまつり ～人形たちの宴～
2009 (H21)	平成21年4月25日～8月23日	シリーズ展	民具は語るⅦ 除草機が語る近代農業革命
2009 (H21)	平成21年7月25日～9月13日	コーナー展	涼しさを呼ぶ奈良茶碗展
2009 (H21)	平成21年9月19日～11月23日	特別展	奈良県の牛耕用具特別公開(県指定有形民俗文化 財) ～農具にみる古代の息吹～
2009 (H21)	平成21年12月12日～22年1月31日	シリーズ展	民具は語るⅧ 山の仕事に見る伝統技法
2009 (H21)	平成22年2月27日～4月4日	季節展	ひなまつり ～人形たちの宴～
2010 (H22)	平成22年4月24日～8月22日	企画展	モノまんだら 人にとってモノとは何か ～クジと袋～
2010 (H22)	平成22年9月18日～11月23日	企画展	日々の暮らし ～子育ての民俗～
2010 (H22)	平成22年12月11日～23年2月6日	企画展	大和郡山の祭りと行事
2010 (H22)	平成23年2月26日～4月3日	季節展	ひなまつり ～人形たちの宴～

※移動展は含まず

みんなく春夏秋冬

平成22年度の活動報告

【展 示】

- ◎4月24日(土)～8月22日(日)
企画展「モノまんだら クジと袋～人にとってモノとは何か～」
- ◎9月18日(土)～11月23日(火・祝)
企画展「日々の暮らし～子育ての民俗～」
- ◎12月11日(土)～2月6日(日)
企画展「大和郡山の祭りと行事」
- ◎2月26日(土)～4月3日(日)
季節展「ひなまつり～人形たちの宴～」



【特別陳列】

- ・7月10日(土)～8月29日(日) 新出『平城旧趾之図』の公開
新たに奈良市内で確認された明治24年写の「平城旧趾之図」(法制史家浅井虎夫収集)を平城京域の民俗写真とともに紹介。

【コーナー展】

企画展示場入口や通路の展示ケースを利用して、季節や開催展示に関わるコーナー展を実施。

- ・9月～12月 暮らし絵に見る子どもの遊び
- ・1月5日(水)～2月12日(土) 大和万歳資料
古典万歳の代表的な存在である大和万歳の衣裳や楽器や史料を紹介。

【玄関ホール展】

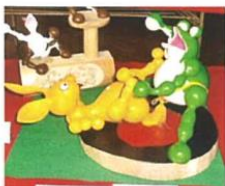
- ・9月11日(土)～10月24日(日) 村上里美が描く



「大和の祭り」

奈良市在住の日本絵手紙協会公認講師村上里美氏が独特の筆致で描いた大和の祭礼風景を紹介。

- ・8月22日(日)～9月5日(日) みんなくひょうたん展 (協力京：阪奈愛瓢会) ・8月28日(土) ・29日(日) ひょうたん絵付け講習会 (協力：京阪奈愛瓢会)



【催し物】

- ・5月23日(日) 国際博物館の日・遠野物語100年記念講演会「“大和し麗し”の民俗」(講師：国立歴史民俗博物館 名誉教授 岩井宏實氏)
*概要は民俗博物館だより(本号)に掲載
- ・7月11日(日) 民俗映像上映会「三都の祭り～祇園祭り・天神祭り・おん祭り～」
コメンテーター：春日大社権宮司 岡本彰夫氏
- ・9月26日(日)/10月24日(日)/11月21日(日)
「カマドの火を眺めながら聞く大和の昔話」



民俗公園内の旧白井家住宅のカマドに火を入れ、その音や匂いととも、昔話の朗読を聞く。民家が語りの場として大きな力を発揮し、好評であった。(協力：朗読と音訳のグリー

ングラス)

- ・8月22日(日) みんなで「みんなく盆踊り」



夏の夕刻、旧白井家住宅前広場で「江州音頭」「河内音頭」で盆踊り。音頭取り三門忠博。(協力：大和茜会)

- ・11月13日(土)/14日(日) 関西文化の日記念ワーク



ショップ「はたおりから大和を語る」

県指定無形文化財「奈良晒の紡織技術」を伝える月ヶ瀬奈良晒保存会による紡織用具及び作品の展示やオウミ(苧績み)体験、竹おさの復元製作(金城弥生氏)、大和機による織り(澤田絹子氏)が行われた。(協力：月ヶ瀬奈良晒保存会)

- ・1月5日(水) / 7日(金)
大和郡山の祭りと行事を巡る
企画展「大和郡山の祭りと行事」を観覧(解説：民俗写真家 田中真人氏)するとともに、郡山の冬の行事を巡る。5日は民博から小泉庚申堂の初庚申、7日は植槻八幡神社のオンダ祭りから民博へ(協力：大和郡山観光ボランティアガイドクラブ)

- ◎2月19日(土)～3月6日(日)

「古民家でひなまつり体験」

旧白井家住宅にお雛様を飾り、座敷にのぼって、民家での雛祭りを体験。(協力：NPO法人やまと新発見の会)

【博学連携】

- ・学校教育の場に博物館資料を生かす試みとして、高校等の授業を受け入れ。当館学芸員が解説。
5/28 法隆寺国際高校(40名)
- ・西の京高校地域創生コース「観光学入門」(1年生)の一環で11月30日(火)「春日若宮おん祭り」の授業に当館学芸員を派遣。

【その他】

- ・6月25日(金) ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業「文化遺産保護青年指導者研修・交流プログラム」によるアジア太平洋地域の文化財保護に関わる青年指導者研修生11名他を迎え、県立民俗博物館の紹介と展示解説、さらに民家でのカマド炊きごはんでおにぎり体験。(6年目)

【公園】

- ・ひょうたん・ささゆりなどの栽培
- ・梅の木ファミリー 4/20・5/30・7/4・8/22・9/26草刈り、6/13摘果、10/17総会(お別れ会) 親睦会、12/8剪定講習会、12/26ミニ門松作り
- ・「花の谷」の整備 平成20年度から県とNPO法人との協働事業として取り組みを継続し、「花の谷」を来園者の憩いの場、子ども達の感動型体験学習、環境教育の場としての機能をさらに高める。

平成23年度の活動計画

【展示】

- ・4月30日(土)～9月4日(日)
企画展「モノまんだらⅡ 太鼓とカネ」
- ・10月1日(土)～2月5日(日)
企画展「民具コレクション 大和のはたおり用具」
- ・2月25日(土)～4月8日(日)
季節展「ひなまつり ～人形たちの宴～」

【コーナー展示】

館内企画展示場入口や通路の展示ケースを利用して、季節や展示に関わるコーナー展示を随時実施。

【玄関ホール展】

- ・6月4日(土)～7月24日(日)
「新・県指定民俗文化財の紹介」
新たな県指定民俗文化財を写真等で紹介。
- ・9月11日(日)～9月25日(日)
「みんなく・ひょうたん展」
(協力：京阪奈愛瓢会)
- ・10月29日(土)～12月4日(日)
写真展「私がとらえた 大和の民俗」
写真家10名が「これが大和の民俗」とそれぞれの視点で切り取った写真競作展。10/30 13時30分～
野本暉房氏・田中真人氏による写真解説

【催し物】

- ・5月22日(日) 13時30分～
国際博物館の日記念講演会
「いま民俗学とは ～民俗文化の変容に直面して～」
(講師：花園大学副学長 芳井敬郎氏)
- ・6月19日(日) 13時30分～
民俗映像上映会 ～大和のカネ～
「東佐味の六斎念仏」「東安堵の六斎念仏」「八島の六斎念仏」
- ・8月21日(日) 13時30分～
民俗映像上映会 ～大和の太鼓～
「大柳生の太鼓踊り」「吐山の太鼓踊り」「国栖の太鼓踊り」「丹生の太鼓踊り」
- ・11月20日(日) 13時30分～
関西文化の日記念講演会
「大和郡山の歴史と文化」
(講師：大和郡山市文化財審議会々長 長田光男氏)
- ・2月12日(日) 13時30分～
民俗映像上映会 ～関東の祭り～
「佃祭り」「秩父祭り」
(コメンテーター：日本音楽研究家 樋口 昭)
- ・2月18日(土)～3月4日(日)
古民家でひな祭り(自由見学)

【職員異動】

平成22年4月1日～平成23年1月31日 橋本拓也学芸員
平成23年3月1日～ 吉本由梨香学芸員

【表紙解説】

大和郡山市洞泉寺町の源九郎稲荷神社は、豊臣秀長が郡山城築城の際、吉野川のほとりから遷したといい、その使いである白狐はさまざまな伝説を持つ。昭和初年から白狐渡御として市内を練り歩く行事が行われ、昭和12年からは、子どもたちが狐の扮装をするようになった。その後途絶えたが、昭和53年に復活され、現在では春のお城祭りの一環としてお渡りが行われ、小型のダンジリも登場する。

奈良県立民俗博物館だより Vol.37 NO.1 (通巻102号)

2011(平成23)年3月1日発行
編集発行 奈良県立民俗博物館
〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地
TEL.0743-53-3171 / FAX0743-53-3173
印刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良県立民俗博物館

開館時間：午前9時～午後5時(入館受付は午後4時30分まで)
※民俗公園内の民家集落は午後4時まで
休館日：月曜日(休日にあたる場合は翌日に振替)
年末年始(12月28日～1月4日)
観覧料：大人200円 大・高生150円 中・小生70円
※20名以上、団体割引あり
※65才以上、障害者と付添1名は無料
交通案内：近鉄郡山駅→奈良交通バス①のりば→「矢田東山」下車
→北へ徒歩10分/公園・博物館利用者専用駐車場あり